
《論 文》

認知語用論の展開 — レトリック研究を中心に —

眞 田 敬 介

要 旨

「認知語用論」(cognitive pragmatics)は、人間の認知の観点から構築された語用論理論であるが、言語学においてこの用語は、これまで少なくとも次の二つの意味で用いられてきた。一つは、Sperber and Wilson (1986/1995²)の提唱した語用論理論である「関連性理論」(relevance theory)の別名として、もう一つは、Langacker (1987)らの提唱した「認知言語学」(cognitive linguistics)の枠組みに大きく依拠した語用論理論の名称として、である。本論は、この二つの認知語用論の展開を、方法論や分析事例(本論はレトリック研究に焦点を当てる)の観点から素描し、認知語用論の今後の展望を示したい。

キーワード：認知語用論，認知言語学，関連性理論，レトリック

1. はじめに

「語用論」(pragmatics)とは、言語が人間によってどのように使用されているかを、言語の情報伝達上の機能と使用場面を考慮しつつ追求していく分野である。この問題を、さらに人間の認知の観点から追究するのが、「認知語用論」(cognitive pragmatics)である。

言語学において認知語用論という用語は、元々、Sperber and Wilson (1986/1995²)が提案した「関連性理論」(relevance theory)の別名として用いられていた(引用中の下線は、特に断りのない限り、本論の筆者によるものである)。

- (1) 「関連性理論は、Griceの意図推論的発話理解の主張をさらに認知的に妥当な語用論理論として発展させようとした試みである。関連性理論が持つ認知的スタンスは、概して規範的、あるいは社会学的な性格を帯びていた従来の語用論理論とは対照的であり、最近では特に「認知語用論」(cognitive pragmatics)としてのアプローチをより明確にしている(…)。上記の伝達意図の理解や、コミュニケーションに用いられる推論能力の発達という、いまだほとんど未知の領域に一石を投じる理論としても注目される」 [松井 2003: 593]

一方で、認知語用論は、Langacker (1987) らにより提唱された「認知言語学」(cognitive linguistics)の知見を生かした語用論理論の名称として用いられることも最近は多い(山梨 2004 : 第3章, 崎田・岡本 2010など)。

- (2) 「認知語用論のアプローチは、言葉の背後に存在する主体の認知能力の観点から、言葉の使用と解釈の諸相をダイナミックに研究していく新しい語用論のアプローチである。換言するなら、認知語用論のアプローチは、新しい言語科学の研究として注目されている認知言語学の観点から、言葉の伝達のメカニズムを明らかにしていくアプローチである」

[山梨 2004 : 107]

以上、認知語用論という用語には少なくとも二つの意味があることを見た¹。しかし、Wilson (2010) が指摘するように、関連性理論と認知言語学は、言語使用の認知的観点からの解明という共通志向を持つにも関わらず、両者の交流はあまり活発であるとは言い難いのが現状である。

眞田 (2009) は、「認知」の位置づけ方の観点から複数の言語理論を概観した上で、異なる言語理論同士の比較を改めて積極的に行うべきであると主張した。本論はその議論を受け継ぎ、関連性理論と認知言語学が語用論の現象（ここではレトリック研究に注目する）をどのように分析してきたかを比較する。この分析の検討を通して二つの認知語用論の展望を概観し、認知語用論の今後の可能性を展望したい。

本論の構成は以下の通りである。まず、第2節で、これまでの語用論がどのような分析を提供してきたかを一部概観する。特に、本論の議論に関わる「(間接) 発話行為」と「会話の公理」を取り上げる。第3節で、関連性理論の別名としての認知語用論と、認知言語学の枠組みが適用された語用論理論としての認知語用論を概観する。第4節で、二つの認知語用論それぞれによるレトリックの分析事例を紹介する。第5節で、本論全体のまとめに代えて、認知語用論の今後の可能性を展望する。

2. これまでの語用論の分析

「語用論」(pragmatics) という用語の誕生は、記号論研究で知られる哲学者 Charles Morris に遡る。彼は、記号 (signs)、その記号によって指される対象物 (the objects to which the signs are applicable)、そして記号を使う解釈者 (interpreters) の三要因を設定した上で、語用論を「記号と解釈者の関係」(the relation of signs to interpreters) を扱う分野と規定した (Morris 1955 : 217-218)。このように、語用論は哲学から生まれたものと言え、その後、哲学的な語用論を受け継いだ「理想言語学派」と、John L. Austin や John R. Searle, H. Paul

Grice らに代表される「日常言語学派」に分かれた（詳細は加藤 2009：1. 1 節を参照）。

本論は後者の学派を扱う。その上で、以下、これまでの語用論が提供した分析の中で、特に重要な位置づけがなされてきた「（間接）発話行為」と「会話の公理」を概観する。

2. 1. （間接）発話行為

哲学では長い間、平叙文は何かを述べる（describe）だけであると仮定されていた（Austin 1962：1）。また、形式意味論において、文とはその命題の真理値（truth value）を問えるものであるというのが常識であった。例えば、He is a doctor. という平叙文は、主語である彼が医者であるならば、文の命題は真（true）である。一方、彼が医者でないならば、文の命題は偽（false）である。このような具合に文の命題の真理値が決められる。

しかし Austin (1962) がしたように、文の命題の真理値（truth value）を問えない文もあり、また、平叙文は必ずしも何かを述べる機能を果たすだけとは限らない。例えば(3)を見よう。

- (3) a. I name this ship the *Queen Elizabeth*. [Austin 1962：5]
 b. I bet you sixpence it will rain tomorrow. [ibid.]

(3a)は船の進水式場で発せられた場合、文を発することで船に命名するという行為（act）を行なっていることになる。(3b)も同様に、文を発することで賭け（betting）という行為を行っているのである。いずれの平叙文も、「述べる」以外の行為が行われているというのが重要である。このように、我々は文を発することで何か（文を発する以外の）行為を行うことがよくある。このような機能を Austin は「遂行的」（performative）と呼び、上記のような行為を「発話行為」（speech act）と呼んだ。これら遂行的な文は発話された瞬間にある行為が行われるものであり、それゆえ文の命題の真理値を問うことはできない。遂行的な文においては、むしろ、適切に行為が行なわれているかの「適切性」（felicity）が問われるべきだ、と Austin は主張した。

Austin の理論を批判的に継承・発展させた John Searle は、発話行為を分類し、それぞれの行為を首尾よく遂行するための規則を整理した。例えば、(4)のような「依頼」（request）を首尾よく遂行するための条件（「適切性条件」（felicity conditions）と呼ばれる）は(5)のように整理される（S, H, Aはそれぞれ speaker, hearer, act を指す）²。

- (4) I ask you to open the window.
 (5) a. 命題内容条件：Future act A of H.
 b. 準備条件：i. H is able to do A. S believes H is able to do A.
 ii. It is not obvious to both S and H that H will do A in the normal course

of his own accord.

- c. 誠実条件：S wants H to do A.
- d. 本質条件：Counts as an attempt to get H to do A.

[Searle 1969 : 66]

(5)に挙げた条件は、依頼を首尾よく遂行するための必要十分条件である。このような、条件・規則の観点からの理論の構築には、「人間の言語使用は規則に支配されている (rule-governed)」という Searle (1969 : 22) の思想が色濃く反映されていると言えよう。

さて、(4)の例を再度見られたい。これは、I ask you と明言することで、直接的な依頼表現であることがわかる表現である。しかし実際の言語使用においては、I ask you (もしくは日本語で「(私はあなたに) 頼む」) と明言せずに依頼することは十分可能である。(6)を見よう (以下、本論に載せる日本語の例文は、全て筆者の作例である)。

- (6) a. It's hot in here.
- b. この部屋は暑いですね。

もちろん、純粹に自分のいる場所の気温を報告するために(6)を述べたとも考えられる。しかし、暑いから窓を開けてほしいという間接的な依頼をするために(6)を述べた、という解釈も可能である。後者の解釈に基づけば、(6)は間接的に依頼をしていることになり、これは「間接発話行為」(indirect speech act) と呼ばれる (詳細は Searle 1979 : 第2章を参照)。

2. 2. 会話の公理

Grice (1989) は、人間が会話を行う際にある公理に従っていることを主張し、(7)にまとめるような、会話における「協調の原則」(cooperative principle) を構築した。Grice によると、我々が会話をするときは、次の公理を守るものだというのである (なお、以下の公理は命令文で書かれているが、Grice は公理を守れと命令することを意図したわけではない)。

- (7) a. 量 (Quantity) の公理 :
 - i. Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).
 - ii. Do not make your contribution more informative than is required.
- b. 質 (Quality) の公理 : Try to make your contribution one that is true.
 - i. Do not say what you believe to be false.
 - ii. Do not say that for which you lack adequate evidence.

- c. 関連性 (Relevance) の公理: Be relevant.
- d. 様態 (Manner) の公理: Be perspicuous.
 - i. Avoid obscurity of expression.
 - ii. Avoid ambiguity.
 - iii. Be brief (avoid unnecessary prolixity).
 - iv. Be orderly.

[Grice 1989 : 26-27]

しかし実際の会話場面では、上記の公理に違反する会話はいくらでもある。そして Grice (1989 : 24-31) によると、我々は、そのような違反をした会話をすることによって、何かを「含意する」(implicate)するのである³。例えば、以下の(8)は、聞かれたことに対して十分な回答を与えていない点で、量の公理 (7a-i) に反する。

- (8) (哲学の教員職を応募する学生 X の推薦状にて) “Mr. X’s command of English is excellent, and his attendance at tutorials has been regular.” [Grice 1989 : 33]

哲学の教員職を応募する学生の推薦状に書く内容としては、応募者の英語力や出席状況の良さ以上に、教員職に応募する資格があることの方が重要である。(8)の話し手は、このより重要な情報を述べていないと言う点で、十分な情報を与えていないということになる。そこで(8)の聞き手は、「当該学生は、哲学の教員職応募にはふさわしくない」という含意を得ることになる。

一方、(9)は、話し手の本音に反することを言っている点で、質の公理 (7b-i) に反する。

- (9) (話し手を裏切った X を評して) “X is a fine friend.” [Grice 1989 : 34]

この文は皮肉 (irony) または嫌味を含意する、と聞き手は解釈するであろう。

3. 認知語用論とは

本節では、二つの認知語用論の概観を行う。まず 3. 1 節で、関連性理論の別名としての認知語用論を紹介する。次いで 3. 2 節で、認知言語学の枠組みが適用された語用論理論の名称としての認知語用論を紹介する。なお、それぞれの認知語用論を、以下「関連性理論」「認知言語学」と呼ぶことにする。

3. 1. 関連性理論

関連性理論は、Sperber and Wilson (1986/1995²) が、Grice の会話の公理の一つである「関連性の公理」(7c)を最重要なものとし、その公理を軸に発展させた語用論理論である。彼らは、人間の伝達行為の根底には高い関連性を求めるという原理がある、と主張し、以下の二つの原理から成る「関連性の原理」(principles of relevance)を提案した。

(10) a. “Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.”

[Sperber and Wilson 1995² : 260]

b. “Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.” [ibid.]

(10a)は認知に関する原理で、「人間の認知は最大限の関連性を求める傾向にある」ことを述べる。一方、(10b)は伝達に関する原理で、「あらゆる顕示的伝達行為は、自らの伝達することが最適な関連性を持つことを示す」ことを述べる。

これら二つの原理に則って伝達行為を行うのだが、関連性理論では、発話が伝達する内容を「表意」(explicature)と「推意」(implicature)に二分する。まず、表意とは、(文字や音声などで)明示化された発話に様々な手段で肉付けを行って得られる内容である。例は(11)である。

(11) (レストランで出されたステーキにナイフを入れて) “This meat is raw.”

[東森・吉村 2003 : 39]

(11)の raw が意味する「生の」が、(11)では緩められて「十分に調理されていない」という意味が伝達される。ステーキが文字通り raw であるなら、表面が焼けていることすらないわけで、そのような状態でステーキが出されることはありえない。このような「想定」(assumption)や「百科事典的知識」(encyclopedic knowledge)が(11)の伝達に関わっていると考えられる。

一方、推意とは、表意と違い明示的でない方法で伝達される内容を指す。例えば、(12)を見よう。特に(12B)の発話に注目されたい。

(12) A : Is that new Italian restaurant good?

B : The chef is Italian.

[東森・吉村 2003 : 52]

(12B)の話し手は、“The restaurant is good.”ということを知りたいのだが、この内容は、(12B)で言語化された形式をどう肉付けしても得られるものではない。(12B)の命題は、話題となっているレストランが美味しいことを示す一つの証拠を提示したものであり、その意図を(12

A)の話し手が読み取って、“The restaurant is good.”という(12B)の話し手の伝達内容を理解するのである。

表意にせよ推意にせよ、人間は如何にして相手の言うことを理解するに至るのか、という問題意識から出発し、関連性の原理を提案したことが、人間の伝達研究に対する関連性理論の最大の貢献（の一部）と言えよう。さて、関連性理論は、話し手は「相手が自分にとって関連性の高いことを伝達しようとしているはずだ」と相手の心を読む能力を持つ、と考える。「相手の心を読む」能力は「メタ表示能力」(metarepresentation theory)（東森・吉村 2003：3）と呼ばれる。この能力は、人間の認知に大きく関わる能力であり、(1)で引用した松井(2003：593)の言う「伝達意図の理解や、コミュニケーションに用いられる推論能力の発達」に不可欠なのが、まさにこのメタ表示能力なのである。この認知能力に依拠した語用論理論が関連性理論であり、関連性理論が認知語用論という別称を与えられた理由を示すものであろう。

3. 2. 認知言語学

認知言語学は、言語を人間の認知能力の反映と捉える言語理論であり、言語使用が人間の認知能力によってどの程度動機づけられているか、を研究課題とする。

認知言語学において、意味とは「概念化」(conceptualization)であるとされる(Langacker 1987：5)。ここでは、人間がモノや事態を言語で表現する際、そのモノや事態をどう概念化するか、言いかえれば、どう解釈するかという「捉え方」(construal)が大きな鍵となる。例えば、陸地と海の境目（すなわち海岸）を言語化する際、英語ではcoastとshoreがあるが、前者は陸から海を見る際に使われ、後者は逆に海から陸を見る際に使われる。以上は語レベルの例であったが、文レベルでも同じことが言える。例えば、太郎が次郎を殴るという事態を、太郎側に視点を置きながら言語化する際、「太郎が次郎を殴った」などと言えるが、「次郎が太郎に殴られた」とはあまり言わないであろう（後者の表現は、次郎側に視点を置いた場合に有効となる）。

以下、紙幅の都合上、第4節の議論に関係する認知能力—「比較能力」(ability to compare)と「参照点能力」(reference-point ability)—のみ紹介する。

比較能力とは、文字通り二つ以上のものを比べる能力である。この能力が使われるのは、例えば、山へキノコ狩りに行ってあるキノコを見つけた時に、「椎茸と似ている（だから食べられるかもしれない）」と判断するような場面である。言語使用との関連で言えば、比較能力はメタファー（隠喩）の使用を動機づける。例えば、月見うどんは、卵の黄身が月と似ているからつけられた名前だが、ここで両者が似ていると判断できるのは、卵の黄身と月を比較したことによる。

次に参照点能力とは、ある実体Aを理解するために、別の（より認知しやすい）実体Bを参照する能力である。例えば、「コップの底」と言うとき、コップを参照してからその底を概念

化する。このときコップが参照点の役割を果たす。実体Aと実体Bを比べた際、通常、前者の方が後者よりも何らかの点で接近しやすい (accessible) 情報である。例えば、「B駅はA駅の隣である」という文は、A駅を参照点にしてB駅の場所を示すために発せられるものだが、「A駅」の箇所には、話し手も聞き手も知っている駅の名前が入るのが普通であろう。

最後に、文レベルで言語伝達を行う例を見よう。例えば、グラスに半分だけ水が入っている事態を言語化する際、次の二通りが考えられる。

- (13) a. This glass is half-full.
b. This glass is half-empty.

これは、グラスに半分水が入っている事態を肯定的に捉えるか (13a) 否定的に捉えるか (13b) によって使い分けられる。ただ客観的に「グラスに半分水が入っている」という事態を伝達するのみならず、話し手がその事態をどう捉えているのかも伝達されるのである。このように、言語伝達に際しても、人間の捉え方が大きく関わっていることが示される。

なお、嶋田・岡本 (2010: 2-12) によると、関連性理論と認知言語学の違いの一つに、語用論研究に際し認知的側面を重点的に考慮するか、それに加えて社会的側面も考慮するかの違いを挙げている。

4. 二つの認知語用論：レトリックの分析を通じて

本節では、レトリック (比喩) 研究を例に、二つの認知語用論の分析方法を比較する。レトリックは、もともと、「説得のための表現の技術」や「芸術的表現の技術」を受け持つ修辭的表現としての意味合いが強かった (佐藤 1992: 20)。小学校や中学校の国語の時間で、詩や短歌・俳句などの芸術的作品を扱う単元で初めて「比喩」という言葉を知った人々が多いと思われる。しかし、佐藤 (1992) や Lakoff and Johnson (1980) らにより、レトリックは修辭的表現の問題に留まらず、我々の日常言語使用においても実に豊かに観察されることが明らかになり、「私たちの日常的なものの見かたの中にどれほどことばのあやが(したがって認識のあやが)必然的な要素として根づいているか」(佐藤 1992: 294) が示されたのである。

例えば、3. 2節で挙げた「月見うどん」は、卵黄を月と類似していることから使われているメタファーの例である。また、「赤ずきんちゃん」は、物語の主人公である女の子と、彼女が身に付けている赤ずきんとが隣接していることから使われるようになったメトニミー (換喩) の例である。これらはすべて名詞 (句) のみを取り上げて提示した例であるが、当然ながらこれらのレトリックは、我々の間で自然に起こりうる会話内でもよく見られる。

- (14) a. うっかり秘密をもらしてしまった。
b. 電話が鳴ってるよ。

(14a)は「秘密」を液体にたとえたメタファーの例である。(14b)の「電話」は「電話本体」ではなく「着信音」を指すが、これは両者の間にある隣接関係によるメトニミーの例である。

以下、4. 1節で、レトリックが伝統的な語用論においてどのように分析されたのかを概観し、4. 2節で、レトリックが二つの認知語用論でどのように分析されてきたのかを概観する。

4. 1. 伝統的な語用論によるレトリック分析

伝統的な語用論においては、筆者の管見の限り、上記三種の中でメタファーのみが扱われてきたようなので、本節ではメタファーの分析例を概観する。Grice の会話の公理によると、メタファーは、当該表現を字義通りに解釈した際に、質の公理の第1番目(7b-i)に違反しているということを示すとされる。Grice が挙げた例(15)を見よう。

- (15) You are the cream in my coffee. [Grice 1989 : 34]

当然ながら相手（人間）がコーヒーに入れられたクリームであることはあり得ないので、偽であることを述べていることになり、(7b-i)に違反している。ここでは、聞き手とクリームの間にある何らかの類似性に訴えた含意を伝えていると考えられる。Grice の与えた説明によると、話し手が(15)を発話することで、聞き手は「あなたは私の誇りであり楽しみだ」と解釈し、次いで「あなたは私の破滅のもとだ」という皮肉を言われたものと解釈する。

このような伝統的な語用論によるメタファー分析は、メタファーは字義通りの表現と比べると特殊な表現であるということを示すものである。しかしこれは、メタファーが字義通りの表現よりも処理に困難が生ずるとは必ずしも言えない、という実験結果（cf. Tendahl 2009: section 2.3.2.3, section 2.7）により、関連性理論や心理言語学の方面から批判されてきた。また、認知言語学でも、メタファー表現は日常において広く用いられることを主張した Lakoff and Johnson (1980) からの批判がある。次節では、関連性理論や認知言語学がこの批判をどう解消するのかを概観しよう。

4. 2. 「認知語用論」とレトリック分析

4. 2. 1. 認知言語学による分析

レトリック研究は、関連性理論でも認知言語学でも盛んになされてきたが、先に挙げた Lakoff and Johnson (1980) が認知意味論（認知言語学の思想を大きく共有した意味論理論）の道筋を開いたことで知られているので、まず認知言語学によるレトリック研究を紹介する。

始めに、3. 2節の繰り返しになるが、類似関係に基づくメタファーは「比較能力」に動機づけられている。また、メタファーの動機付けを説明する際に特に重要視される概念の中に、「経験」(experience)と「身体性」(embodiment)が挙げられる。これは一言で述べるなら、我々が用いるメタファーは恣意的に存在するのではなく、我々の身体的・文化的経験に基づくというものである(Lakoff and Johnson 1980: 14)。例えば、HAPPY IS UPというメタファー(例として、I'm feeling *up* today. などがある)は、「我々が気分の良い時は、通常上向きの姿勢をとっているものである」(Lakoff and Johnson 1980: 15)という我々の身体的経験に動機づけられている。また、ARGUMENT IS WARというメタファー(例、He *shot down* all of my arguments)は「議論をするときは相手に自分の意見を納得させるよう進めるものである」などと言った経験に基づくものである。これらのメタファーにおける「幸福」と「上方向」、そして「議論」と「戦争」は、「卵黄」と「月」と比べて客観的に似ているとは言い難い。それでも「幸福」と「上方向」、「議論」と「戦争」は我々の経験に基づき、何らかの点で類似性を見いだせるのである。

メタファーの分析については、もう少し理論的説明を補っておこう。実体Aを、それと類似する実体Bに基づき理解する時、実体Aに備わる知識の総体(認知言語学ではこれを「領域」(domain)と呼ぶ)と、実体Bの領域の間で、部分的に要素の写像が行われる、と分析する(Lakoff 1987: 276-278)。例えばARGUMENT IS WARメタファーならば、戦争領域の中からいくつかの要素(例えば「勝ち負けの概念」「攻撃・防御の概念」)を、議論領域に写像する。全ての要素が写像されるわけではない。例えば、戦いに関わる具体的な道具が議論領域に写像される必要はない。実際、「相手を言い負かす」において「相手を大砲で言い負かす」という解釈はまずしない。つまり、「大砲」という要素が写像されることは通常ないということである。

一方、メトニミーは、「参照点能力」に動機づけられていると言える。すなわち、「赤ずきんちゃん」の例だと、「赤ずきん」を参照点として「(赤ずきんを身に付けている)女の子」を理解するのである。

このように、レトリックは人間の認知能力によって動機づけられ、言語使用を認知能力の観点から(すなわち、認知言語学的に)説明することの意義を見いだせる現象の一つと言える。

4. 2. 2. 関連性理論による分析

続いて、関連性理論に基づくレトリック研究を見ていこう。まず、以下のメタファーの例を見られたい(なお、(16a)の主語は、人間の部屋を指しているものとする)。

- (16) a. This room is a pigsty.
b. Robert is a bulldozer.

[Sperber and Wilson 1995²: 236]

いずれも字義通りの解釈は受け入れ難く、むしろ、それぞれ「この部屋は散らかっている」、「ロバートは頑固だ」などのような解釈が得られよう。(16a)の解釈は、この部屋の散らかり具合を、豚小屋に関する一般知識（汚い、臭いなど）に基づき解釈したことで得られるものである。

(16b)は(16a)ほど慣習的とはいえないが、これもブルドーザーに関する一般知識（車体が鉄でできているので強固である、など）に基づき、ロバートの性格を述べていると説明できる。いずれにせよ、発話内容に、言語化されている要素（ここでは pigsty や bulldozer）から得られる想定や百科事典の知識を合わせて、それぞれの表現の推意を得る。そうして聞き手は話し手の意図する解釈を得るのである（Sperber and Wilson 1995²: 236）⁴。このような推意を得るプロセスに関わるのが関連性の原理である。字義通りの解釈をすると奇妙な解釈しかできないが、それでも相手（発話の話し手）は何か自分（聞き手）にとって関連性のあることを伝達しようとしているはずだ、つまり「高い関連性の見込み」を伝達するものだ、と聞き手は考えるのである。

メトニミーの分析も、メタファーと同様の方法で分析される。次の(17)を見よう。

(17) I drink orange for breakfast.

[東森・吉村 2003: 157]

(17)の orange は（果実そのものではなく）オレンジジュースを指すが、この解釈を得るには、orange から得られる想定（オレンジはオレンジジュースの材料となる）が求められる。

このような、高い関連性を期待する聞き手の志向は、メタファーを理解する際も、それ以外の表現を理解する際も共通して見られる、と関連性理論は明確に主張する。もっと言うと、レトリックと日常言語を区別して分析する必要はないと主張する。

(18) “On this approach, metaphor and a variety of related tropes (e.g. hyperbole, metonymy, synecdoche) are simply creative exploitations of a perfectly general dimension of language use. The search for optimal relevance leads the speaker to adopt, on different occasions, a more or a less faithful interpretation of her thoughts. The result in some cases is literalness, in others metaphor. Metaphor thus requires no special interpretive abilities or procedures: it is a natural outcome of some very general abilities and procedures used in verbal communication.”

[Sperber and Wilson 1995²: 237. cf. Wilson 2010: section 3]

例えば、以下の字義通りの発話を見よう。

(19) （チケット売り場で）I am a student.

[東森・吉村 2003: 147]

この発話は、学生用のチケットを買いたい旨を伝達するものである。これも、(19)の発話内容に、「話し手はチケットを買いたがっている」や「学生は大人より安い料金でチケットを買うことができる」などの推意を合わせて、その場面で適切な解釈を得るのである。このような(19)の解釈プロセスは、(16)や(17)で見てきたレトリック表現の解釈と同一の方法で分析されていることに注意されたい。

4. 2. 3. 認知言語学と関連性理論の分析比較

これまで、認知言語学と関連性理論の枠組みによるレトリック分析を見てきた。いずれの枠組みにおいても、レトリックという「言葉の綾」を日常言語使用と切り離すことはせず、日常言語と同様の方法で分析できることを明らかにしたものである。細部を見ると、認知言語学的分析では、人間の認知能力の反映としてレトリックを分析し、メタファー・メトニミー・シネクドキーそれぞれに関わる認知能力を特定することで、上記三種のレトリックが、人間の認知能力によって動機づけられることを示した。一方、関連性理論的分析は、レトリックも聞き手にとって関連性の高い情報を伝達していることを伝えるものと主張した。

ここで、関連性理論的レトリック研究は、メタファーとメトニミーをほぼ同様の枠組み（すなわち、関連性の原理）で分析したことを思い出されたい。関連性の原理というシンプルな道具立てで、メタファーのみならずメトニミーや他のレトリック（アイロニーなど）を、しかも日常言語使用と同様の分析で説明できることを打ち出した点で、関連性理論の枠組みは、認知言語学的分析に比べ、経済的と言ってよいだろう。

しかしこのような関連性理論的分析は、次の二点において批判的となる。一つ目に、「高い関連性の見込み」に道具立てをまとめることで、メタファー・メトニミー・シネクドキーそれぞれの現象の特性を見失うこともないとは言えない。二つ目に、関連性理論のメタファー分析は、「なぜ今あるメタファーを我々が持っているのか」という問題に答えられない（Tendahl 2009: 111）。この二つの問題点に対し、認知言語学は「認知能力」に依拠して答えを出す。一つ目の問題に対しては、メタファーとメトニミーそれぞれの特性を、それぞれの認知能力の観点から明らかにする。二つ目の問題に対しては、「人間には比較能力という認知能力があるからである」と答える。

メタファーの例を適切に解釈する際に関連性の原理が関わっていることは、疑いようがない。(16a) で言えば、その例で取り上げられている部屋が、字義通りに豚小屋であるはずがない。その解釈は関連性がなく、もっと関連性がある解釈として「この部屋は豚小屋のように汚い」などと解釈するのである。しかし、高い関連性を見込みを得るのにどのような推論が関わっているのか、という問題に関連性理論は答えてくれないように思われる。この問題に答えられるのが認知言語学である。現時点での筆者の仮説だが、高い関連性を見込みを得る際に基盤となるのが人間の一般的認知能力である、と言えないだろうか⁵。

さて、認知言語学的レトリック分析の成果により、従来レトリックの範疇に含まれてこなかった現象にもレトリックが関わっていることを示す重要な研究成果が出ている。次節はその一例として、間接発話行為の理解や使用にもメトニミーが関与することを論じた Thornburg and Panther (1997) を概観する。

4. 2. 4. 認知言語学的レトリック研究の応用：間接発話行為におけるメトニミー

まず、(20)を見よう。

- (20) It did not take Gaffer long to explain what he wanted the Italian to do. “Well,” he concluded, “what about it? *Can you* do it?”

[Thornburg and Panther 1997 : 210. イタリックは原著による]

“Can you do A?” は、字義通りには、聞き手がAを行う能力の有無を問うが、ここではむしろ聞き手への依頼と解釈するのが自然である。つまり、(20)では相手のAする能力の有無を問うことで、間接的に依頼という発話行為を遂行している間接発話行為（2. 1 節）の例である。

Thornburg and Panther (1997) の主張によると、この、能力を問うことによる間接的な依頼には、メトニミーが関わっている。具体的には、聞き手HにAさせようとする指令的発話行為 (directive speech acts. なお、依頼もこの一種である) は、(21)にまとめたような一つのシナリオ (彼らの言う speech act scenario) を成す (このシナリオは、2. 1 節で概観した Searle の発話行為の適切性条件 ((5)を参照) を発展させる形で構築されている)。

- (21) (i) the BEFORE : H can do A.

S wants H to do A.

- (ii) the CORE : S puts under a (more or less strong) obligation to do A.

the RESULT : H is under obligation to do A (H must/should/ought to do A).

- (iii) the AFTER : H will do A.

[Thornburg and Panther 1997 : 208]

ここでは(21i)にある “H can do A” という要素に注目されたい。(20)で行なわれている依頼は、まさにこの要素を参照して行われているのだ、ということである。

(21)のシナリオに基づくメトニミーによる間接発話行為の例は、(20)の他にも多くある。

- (22) a. ‘*I want* to marry you,’ he said. ‘We will live for ever in a little house by the sea.’

[Thornburg and Panther 1997 : 212. イタリックは原著による]

b. He said, Do you want to marry me, Elizabeth? And then I said, Yes, my love, *I want to marry you.* [COCA]

c. 'Julie, you're wet. *You must change.*'

[Thornburg and Panther 1997 : 214. イタリックは原著による]

d. [自殺をしようとしている S が, 自殺を手助けするよう H に言っている場面]

You must help me. Hold it firmly...

[The Last Samurai のシナリオより]

(22a) (22b) は (21i) の S wants H to do A を, (22c) (22d) は (21ii) の 'H is under obligation to do A' を参照点として認知し, 依頼や義務付けという発話行為全体を表している。

さて, この Thornburg and Panther (1997) の研究成果を, 関連性理論はどう説明するだろうか考えてみたい。筆者には, この発話行為メトニミーの関わりとされる例に対しても, 「高い関連性の見込み」に基づき推意を得ると説明すると思われる。本節の例で言えば, (20) のように相手に何かをする能力の有無を聞いたり, (22a) (22b) のように話し手自身の願望を述べたり, (22c) (22d) のように相手に何かをする義務があることを述べたりすることで, (それぞれの例の文脈に照らし合わせて, 関連性の原理を用いた結果) 相手に何かをしてほしいという旨を述べていると解釈できる, と説明するものと思われる。

しかし, このような文脈と関連性の原理から推意を得るという説明自体は, どの言語現象にも適用されるごく当たり前のものである (18 も参照)。そのため, 願望の表明により, 依頼という発話行為を遂行したことになるというメカニズムを十分に説明したことにはならない, と筆者は考える (Thornburg and Panther 1997 : 217-218 も参照)。一方, 認知言語学, とりわけ Thornburg and Panther (1997) は, そのメカニズム解明に貢献するのがメトニミーであることを明らかにした, という (これまでの語用論・関連性理論では成されてこなかった) 重要な貢献を成したのである。

4. 2. 5. 認知言語学的メタファー分析における関連性理論の貢献

前節までの議論を見ると, レトリック研究においては, 認知言語学的分析が関連性理論的分析より全面的に優れていることを示唆しているように見えるかもしれない。しかし, 認知言語学的メタファー研究の抱える問題が, 関連性理論によって解決されうることを論ずる研究もある。以下, その議論を行なった Tendahl (2009) を概観しよう。

4. 2. 1 節で概観したように, 認知言語学はメタファーを「2つの領域間の写像」として分析する。その際, 一方の領域にある全ての要素が, もう一方の領域に写像されるわけではないことを述べた。これに関して Tendahl (2009 : 121, 167) は, メタファー理解に際し写像される要素がどのように決まるのか, 認知言語学は明らかにしていない, と指摘する。それを受けて, Tendahl (2009 : 第5章) は, 写像される要素の決定に関わるのが, 関連性の原理であ

る、と主張する。例えば、(ARGUMENT IS WAR メタファーがあるにも関わらず)「相手を言い負かす」を「相手を大砲で言い負かす」と解釈しない、つまり、戦争領域にある大砲という要素を議論領域に写像させないのは、そのような写像をすることに関連性がないからである。

Tendahl の以上の議論は、他の多くのメタファーの例などで検証を続ける必要がある。しかし、彼の議論が正しいとすれば、少なくともメタファー分析においては、認知言語学と関連性理論は明確に補い合うものである、ということになる。

4. 2. 6. 要 約

以上、メタファーを中心としたレトリック研究を取り上げ、関連性理論や認知言語学が何を明らかにしてきたのかを概観してきた。第4節の筆者の主張は、次の二点にまとめられよう。

第一に、関連性理論は、メタファー理解における2つの領域間で要素を写像するに当たり、どの要素が写像されるのかを決定するのに貢献する。この写像要素の選択過程は、認知言語学的レトリック研究では、十分な分析がなされてこなかった点である。

第二に、関連性理論はメタファーとメトニミーを同一の枠組みで説明する余り、それぞれのレトリック現象の特性を見失いかねないと思われる。それに対し認知言語学は、人間の認知能力という観点からメタファーとメトニミーのそれぞれの特性を説明し、かつ、伝統的なレトリック現象を越えた現象（4. 2. 4節の発話行為メトニミー）をも含めて統一的に説明できる。

つまり、少なくともレトリック研究においては、関連性理論と認知言語学は、それぞれの利点を生かし補い合う、ということである。

5. おわりに — 認知語用論の展望 —

本論を締めくくる前に、関連性理論と認知言語学は、次の点で本質的に異なることに注目したい。すなわち、両者は、大津（2008：258）の言葉を借りると、「言語の視点から認知を見定めようとする」（関連性理論）か「認知の視点から言語を見定めようとする」（認知言語学）かにおいて異なる。そのような二者をどう共存させていくか、という問題が出る⁶。この問題に対する本論の見方は、極めて素朴な見方であるが、言語と認知は相互に影響しあっているという見方を採ることである。

4. 2. 3節と4. 2. 5節で見てきたように、少なくともメタファー研究においては、認知言語学と関連性理論は補い合うべきものである。そこで、言語と認知は相互に影響しあっているという見方を採ることを考えたわけである。認知語用論に関して言えば、（関連性理論のように）人間の推論能力という認知プロセスに目を配った語用論理論は必須であり、（認知言語学のように）人間の一般認知能力に基盤を求める語用論理論もまた必須だ、というわけである。

今後は、メタファー以外の現象においても、関連性理論も認知言語学も「両方」不可欠であることを具体的に示す研究が積み重ねられるべきであろう。これにより、これまでの語用論研究の成果を検証し直すことで、認知語用論の発展を図れるものと思われる。

参考文献

- Austin, John L. 1962. *How to Do Things with Words*. Cambridge: Harvard University Press.
- Carston, Robyn. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Grice, Paul. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge: Harvard University Press.
- 東森勲・吉村あき子. 2003. 『関連性理論の新展開：認知とコミュニケーション』, 東京：研究社.
- 池上嘉彦. 1984. 『記号論への招待』(岩波新書(黄版)258). 東京：岩波書店.
- 加藤重広. 2009. 「語用論から認知言語学を見る」, 『日本認知言語学会論文集』第9巻, 535-549.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar Volume 1. Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 松井智子. 2003. 「関連性理論－認知語用論の射程」, 『人工知能学会誌』18(5), 592-602.
- Morris, Charles. 1955. *Signs, Language, and Behavior*. New York: George Braziller, Inc.
- 中村芳久. 2002. 「認知言語学からみた関連性理論の問題点」, 『語用論研究』4, 85-102.
- 大津由紀雄. 2008. 「一生成文法研究者から見た『言語獲得の用例基盤モデル』」, 『日本認知言語学会第9回大会 Conference Handbook 2008』, 255-258.
- 崎田智子・岡本雅史. 2010. 『言語運用のダイナミズム』, 東京：研究社.
- 眞田敬介. 2009. 「言語理論における『認知』の位置づけに関する一考察－一生成文法・関連性理論・認知言語学を中心に－」, 『札幌学院大学人文学会紀要』第86号, 89-104.
- 佐藤信夫. 1992. 『レトリック感覚』, 東京：講談社.
- Searle, John R. 1969. *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986/1995². *Relevance: Communication and Cognition*. Cambridge: Blackwell.
- Tendahl, Markus. 2009. *A Hybrid Theory of Metaphor: Relevance Theory and Cognitive Linguistics*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Thornburg, Linda and Klaus Panther. 1997. "Speech Act Metonymies." In Liebert, Wolf-Andreas, Gisela Redeker, and Linda Waugh (eds.), *Discourse and Perspective in Cognitive Linguistics*, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 205-219.
- Wilson, Deirdre. 2010. "Parallels and Differences in the Treatment of Metaphor in Relevance Theory and Cognitive Linguistics". 『語用論研究』第11号, 42-60.
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』, 東京：開拓社.

コーパス

COCA: *Corpus of Contemporary American English*. (<http://www.americancorpus.org>)

注

- 他に崎田・岡本(2010: 1-2)は、認知科学における認知語用論のアプローチを概観している。
- (5)に挙げた四つの条件の定義は、Levinson(1983: 244)などでわかりやすくまとめられている。
- なお、何かを含意するためには、必ず公理に違反しなければならないというわけではない。公理の守られた会話が何かを含意することも可能である。

- 4 ある表現がどの程度メタファー的（metaphorical）かの度合は、その表現がいくつ推意（厳密には「弱い推意（weak implicature）」）を喚起するかで決まるというのが、伝統的な関連性理論的メタファー分析の要点である。これ以外の分析は Carston（2002）を参照。
- 5 中村（2002：87）「含意を算出する際の推論（…）の能力（三段論法など）が、より一般的な認知能力に由来するとなると、認知語用論（すなわち RT）は、CL に吸収され、その存在意義を失うことになる」も参照。なお、RT と CL は、それぞれ関連性理論と認知言語学を指す。
- 6 関連性理論と認知言語学は、「言語能力が他の一般認知能力と自立していると見るか否か」でも対立する。この問題に対し、関連性理論は肯定的であり、認知言語学は否定的である。この点では、関連性理論と認知言語学が互いに補い合うとは見なし難くなる（Tendahl 2009：183）。

The Development of Cognitive Pragmatics: With Reference to the Study of Rhetoric

SANADA, Keisuke

ABSTRACT

“Cognitive pragmatics” is a pragmatic theory constructed with special reference to human cognition. In linguistics the term itself has been employed thus far in at least the following two ways. On the one hand, it is used as another name of “relevance theory”, a pragmatic theory developed by Sperber and Wilson (1986/1995²); on the other hand, the term is also used to refer to a pragmatic theory which largely depends on the apparatuses of “cognitive linguistics” (Langacker 1987, et al.). Against this background, this paper sketches the development of cognitive pragmatics with special focus on the study of rhetoric, and gives a methodological and empirical survey on future development of cognitive pragmatics.

Keywords: cognitive pragmatics, relevance theory, cognitive linguistics, rhetoric.

（さなだ けいすけ 本学人文学部講師 英語学専攻）